



支点への回帰と物理現実の永続性

令和8年2月2日

黒田 毅

ゼロというバランスの崩壊が、宇宙の誕生を与え、それらが振動というエネルギーの一定数の放出において、空間の形成と物理現実の構築をビッグバン時における圧縮性において構築するという仮説は、全ての物理現実の構築は常にゼロへの回帰運動を自己とし、物理現実の永続性の確立を与えるという仮説を提案するものである。

これら宇宙の飽和性は、空間の維持を与えるものであり、それらは張力の形成における空間の維持を行うと仮説出来るのである。これらエネルギー一定数において空間の維持形成を算出できるものであり、これら一定数のエネルギーの存在はその普遍であると定義できるのである。

またこれらの原理は、 $E=mc^2$, $m=E/c^2$, $c=\sqrt{E/m}$ という定説において現実を与えるものであり、全てこれら現実は数値と数学における説明を可能とできると仮説できるのである。

また時間の形成は、光速度で時間がゼロとなるという特殊相対性理論に基づき、すべての物質性の共有の変化が c という変化であると仮説し、それら変化の共有性が時間の形成であると仮説できるのである。

これらすべての変化と宇宙の誕生は、歪み定数 a の存在を求めるものであり、それら歪みの存在が、これらバランスの崩壊とすべての物理運動の形成を与えると定義できるのである。

これらは粒子運動という現実の永続性は、物理現実の形成を与える基盤であり、粒子運動における働きは変化や振動を有すると考えられる。それらはエネルギーを有するものであり、エネルギー不変の法則において存在すると考えるものである。

これらは宇宙における創エネルギー量の不変性と、エネルギー不変の法則における一定法則のもとでの変化とその共有性は、数値化しその全てを説明できると考えるのである。